

## ヨアンネス・クリュソストモスの神人共働論

武 藤 慎 一

### 初めに

#### (一) 思想上の問題

アウグスティヌス主義が支配的になつた西方キリスト教では、「神人共働」と言うときただちに「異端」が連想されることだろう。ことに古代では、ペラギウス主義の「神人共働説」(synergism)として、とかく負の印象が強い語である。それに対して、一般に東方キリスト教は「神人共働説」的だと言われる。ペラギウス(三五〇年代―四二〇年代頃)はギリシア教父の思想に近いとは言われるが、同時代のギリシア教父の神人共働そのものに関する考えを精察しない限り、比較もままならないはずである。「ペラギウス主義」がペラギウス自身の思想に対するレッテルであるように、<sup>1)</sup>「神人共働説」も東方の思想に対するレッテルで終わつてしまふ。しかし、西方で初めて問題視されるようになった「共働」を後の恩恵論の枠組みで量るのは、時代錯誤の誹りは免れない。例えば、ある特定のギリシア教父の思想がペラギウス主義か、それとも半ペラギウス主義か、という類の問ひの立て方は、勿論研究対象に即していない。し

かし、その共働とは何かは、それ自体で十分考察に値する問題であり、他の様々な問題にも通じる広がりも持つ。特に、東方キリスト教思想にとつては、単に周辺的な問題では済まされない。

本来、西方と比較する場合でも東方の問いの立て方を尊重し、十分に理解した上で行わなければならないまい。そこで本研究では、西方の視点からの「神人共働説」ではなく、「(神人)共働」(συνεργία)そのものを扱う。この場合の「共働」は、神の業において神の働きだけではなく、人間の働きも認めることである。神が人間を援助することは大方の認めるところだが、逆に人間が神を援助する方は、問題視される場合が多い。このような不均衡な「共働」では、言葉だけのものになってしまうがちである。しかし、ギリシア語の *συνεργεῖν* (共働する) は「共に働く」という意味の形容詞 *συνεργός* に由来する動詞だが、そのような神の働きに偏ったニュアンスは勿論ない。また、*συνεργός* は「共働者」という意味の名詞化して、新約にもしばしば登場する。そもそも新約では両語とも、人間が神と共働する意味での、「神人「共働」」に關しても肯定的に使用される。合計十七回の用例では、ローマ八・二八を除いて、専ら人間の働きについて使われている。この場合の共働の相手も人間が多いが、神の場合もある。逆に、神が直接人間と共働する用例は、聖書にはない。ただ、その「共働」とは何かを思想的に発展させて論じるまではなされていない。

この「神人共働論」(the doctrine of synergy、日本語では「神人共働説」と紛らわしいので、以下「共働論」と略す)は、ギリシア教父にこそ期待できる。ただ、実際のギリシア語著述家における用例では、アレクサンドリアのクレメンスを例外として、この語が共働論的に使用される場合、大抵は神ないし神的存在の働きに關してである。つまり、肝心の人間の積極的な働き、しかも神に協力する働きに關しては用例が少ない。それもそのはずで、カルケドン公会議以後のキリスト論論争上の単働論を待たずとも、上からのキリスト論の立場からは、神に対する人間の共働は

重視されないはずである。この場合、「共働」という語は使用されていても、実質は神から人間への「援助」の意味で使用されていることになる。これでは、共働の実態があるとは言えない。その点では、ペラギウス以前の東方の「神人共働説」の代表としてよく引き合いに出されるニュッサのグレゴリオスでも、専ら聖霊による援助に関して語られる。

## (二) 方法論上の問題

ということとは、新約の「共働」とギリシア教父一般の「共働」とでは、隔たりが大きいことになる。語は同一でも、その用法が人と神とで逆転しているのである。それでは、言葉そのものの意味の、神と人間が共に働くという、ある意味で対等な相互関係を徹底的に論じている例は、皆無なのだろうか。その点、下からのキリスト論の立場からは、神に対する人間の「共働」こそが重要になると予想できる。アンテイオキア釈義学派の最大の特徴は、下からのキリスト論である。その背景には、独自の人間観や救済論が横たわっているが、この二つを繋ぐのが救済に関する人間の働きである。

しかし実際には、資料の制約が研究の大きな障害として立ちほだかる。具体的には、デイオドロスでは「共働」という語そのものは使用されているものの、残された資料が限られているため、共働論の十分な展開は見出されない。モプスエステシアのテオドロスでは、現存する『受肉』の断片で「共働する」が頻出するが、他の多くの思想的テクストが残っていないため、彼の共働論の全体像を掴むことは難しい。テオドレトスでは「共働」が比較的頻出するが、ペラギウス論争以降に活躍した人物なので、遅すぎる。その点、東方正教会を代表する教父の一人であるヨアンネス・クリュソストモス(三四九—四〇七年)の著作は、豊富な量が残されている。しかも彼は、ペラギウスと同時期生ま

れなので、比較の対象としても申し分ない。

研究方法としては、一方では聖書のわずかな用例に関する「共働」理解を扱うだけでは、いかにも内容が乏しくなる。他方では、「共働」という語にこだわらずに、いったん神の恩恵と人間の努力とといった幅広い内容を扱い出してしまふと、議論は際限なく可能になるだろうが、「共働」そのものは置き去りにされてしまふ傾向があつた。つまり、従来の「神人共働説」研究では、西方の視点に引きずられすぎて、東方の共働論それ自体の広い視野には到達できないままになる。クリュソストモスでは、膨大な聖書解釈も残されており、聖書の共働理解と思想としての共働論の両方を考察することができる。同一人物において、その両方ともが存在しているのであるから、両者の間の隔たりを埋める可能性が期待できるのである。

実際、彼の思想は「神人共働説」的と言われることが多い。例えば、『靈性事典』の「神人共働説」の項目を執筆したシュピドリック (T. Spidlik) は、クリュソストモスをしばしば引用する。<sup>(5)</sup>しかし、彼における「共働」そのものは、言及していない。彼はキリスト論を始めとする当時の神学論争にはあまり興味を示さなかつたが、共働のような実践的問題には最大の関心を示したので、クリュソストモス研究としてもそれを扱うべきであり、実際に扱われてきた。比較的最近では、ブレントレ (R. Brändle) による一連の「神人共働説」研究がある。<sup>(6)</sup>しかし、従来の「神人共働説」研究では、クリュソストモスにおける神人共働それ自体的を絞り、その全体像を解明するまでには至っていない。したがって、「神人共働説」の偏見を払拭し、積極的な意味での共働論を呈示することはできていない。そこで本研究では、神と人間が互いに助け合つて同一のことを働く、という意味での「共働」そのものを集中して扱う。具体的には、共働一般の用例と聖書における共働理解の検討から始めて、神人共働を人間の側と神の側からそれぞれ考

察し、最後に両者の関係を明らかにしたい。ところで、クリュソストモスにおいては新約では用例がないが *ovepely* の同義語の *oumpōteiv* (協力する) も、多用されている。本研究では、*ovepely* とその関連語の用例を精査するとともに、*oumpōteiv* の共働論的用例にも注目して、彼の共働論の全体像に迫りたい。

## 一 神人共働論の背景

### (一) クリュソストモスの共働一般理解

クリュソストモスの著作において、*oumpōteiv* はごく一般的な語彙であり、その用例は枚挙に遑がない。したがって、ここでは *ovepely* とその関連語の代表的な用例に的を絞って扱う。まずは、人間が共働する場合である。男は男女の共働により生まれてきた。女たちも共働する。家を建てる者たち、地を掘る者たち、海を航海する者たちは、共働を必要とする。王は神の願いにも協力しているし、我々と共働するために神から遣わされた。罪は共働者たちをも必要とする。直接の主語としては、人間の「意志」も登場する。人間の「信仰」も、死者を復活させたペトロの奇跡(使徒九・四〇)に共働していた。このような多様な人間の共働行為の中に神との共働も含まれるのは、ごく自然なことである。例えば、エレミヤは神に「私に協力しなさい。私と共働しなさい」と命令される。

次に、人間以外の用例としては抽象名詞の比喩的用法があり、律法は恵みの反対者ではなく共働者でもある。また、霊的存在者の共働もある。悪魔が人々の強力な共働者として登場し、悪霊たちも人々と共働する。しかし、人間以外のものが神と共働する用例では、殆ど常に否定的に表現される。例えば、太陽や他の星の共働の場合である。一、(二)

で考察するように神が人間以外のものと共働することはあっても、逆はない。つまり、神と共働すると言われているのは、基本的には人間だけである。また、神が人間と共働する方も頻出する。その際、直接の主語としては、神の「右手」や「恵み」も使用される。

## (二) クリユソストモスの聖書の共働理解

クリユソストモスにおいては、旧約の七十人訳の四箇所やヤコブ二・二二、第三ヨハネ八の影響は、特に見当たらない。残りは十四箇所、すべてパウロ書簡中の用例である。まずは第一テサロニケ三・二で、これは人間（テモテ）が「神の共働者」とされている箇所だが、本文批判上の問題がある。彼の使用した聖書本文では、人間が直接神の共働者にはなっていない。他のパウロ書簡の十一箇所と同様、人間がパウロら他の人間と共働する。クリユソストモスはこれらすべての箇所を扱い、神の福音のための働きに関する人間相互の共働と取っている。

それに対して、第一コリント三・九では人間が神の福音のための共働者ではなく、直接「神の共働者」とされている。クリユソストモスの『第一コリント書講話』の当該箇所の講解でも、すべての人間ではないが、人間を神の共働者と理解している。しかし、『ローマ書講話』ではこれと他の箇所が融合して引用され、共働者もパウロら特定の人々に限定されていない。次に、第二コリント六・一には「我々が」共働して」という動詞の分詞表現があるが、共働の相手は明示されていない。クリユソストモスはこれをパウロらがコリント教会の人々と共働している、と解釈する。ただ、次のように付け加える。

「だが、もし彼（パウロ）が神とも共働することを言っているのなら、これも拒否していない。実際、他の箇所でも『我々は神の共働者である』（第一コリント三・九）と述べている。それによりまた、人々を救うことを述べ

ている」。

以上のことから、クリュソストモスの新約理解では、神の救済の働きに人間も共働することを肯定していたことが分かる。

これまではすべて、人間が共働する箇所だった。神が共働する唯一の例はマルコ一六・二〇だが、これは元々本文では存在していなかった箇所、クリュソストモスも引用していない。最後に、例外的なローマ八・二八であるが、最も単純に訳すと、「万事が共働する」となる。この箇所の解釈の可能性の一つとして、神を実質的な主語と取ったとしても、目的語は「万事」になり、解釈が困難である。クリュソストモスの解釈が最も分かるのは、ヨセフ物語を説明した次の箇所である。

「これ故、パウロも『神を愛する者たちにとっては、万事が善へと共働する』（ローマ八・二八）と言っていた。彼は『万事』と述べる。『万事』とは何だろうか。それらは、逆のことも、苦痛に思えることも、善へと変える。それが、まさにこの素晴らしい者にも起こっていたのだ。実際、「ヨセフの」兄弟たちによって起こってしまったことが——創意に富む神の知恵がその悪事全部を善へと一変させるので——とりわけ彼（ヨセフ）に「エジプト」国を紹介した」。

ここだけではなく、クリュソストモスは一貫して、こここの共働を神が人間のために摂理的に配慮して、「万事を変える」ことと解している。彼の著作において、この箇所は大きな役割を果たしている。まず、この箇所を集中して取り上げた独立した講話 (*In illud, Digentibus deum omnia cooperantur in bonum*) が存在し、他の著作の中でも好んで引用され、その数は二十回近くに及ぶ。それで、彼の共働論においても、神が人間と共働する場合に、特に摂理的配慮

と結びついて考えられても、不思議ではない。

## 二 神人共働における人間の役割

### (一) 人間の意志の先行

いよいよ、神人共働自体を扱うにあたって、クリュソストモス自身の設定した問題「万事が神によるのなら、なにも人間が働かなくてもよいのではないか」<sup>(23)</sup>から出発する。これは、神の絶対的支配は人間の怠惰さ、何も働かない(dryos)ことを導くのではないかという疑問で、この両極の対比はクリュソストモスの共働論を一貫して主導するモチーフとなつている。彼は、聖書の中の神の単働論的(monergistic)箇所を解釈して、共働論的な視点から弁証する。

まずは、講話『「収穫は多い」について』の中で、使徒一六・一四と思われる箇所を引用した後、人間の救済に関して論じている。

「だが、彼(主)が山々を低くされ、収穫を行われ、実を稔らせられ、消化を十分によくされるといふことをあなたが聞いた時、信じる者たちから最大の善行を奪つてはならない。実際、彼は意思の自由を強制なさつたり、選択の自由を踏みじつたりしておられなかった。むしろ、協力して下さり、助けて下さり、手を差し伸べて下さつておられた。実際、もし万事が彼のものだったのなら、一切の者たちを救われるのを妨げるものはなかった。だが今、一方では神に属することが起こつていて、他方では近づく者たちに属することが「起こつていた」。願う



ことと選ぶこと、熱意が多で信仰が気高いことを呈示することは、近づく者たちに属すること……「ある」」。神は救済の際、人間の自由意志を妨害せず、自己決定を尊重した。人間は意志のない無生物ではないからだ。神が共働を強制しない以上、個々の具体的な共働は、人間が開始しなければならぬ。クリュソストモスは、この人間の役目を次のように表現する。

「だから、このことを預言者（エレミヤ）も『善行をなすことは、我々ではなく神の助け「次第である」』。だが、選ぶことは我々と我々の選択「次第である」と述べている」。

この「選択」は、「意志すること」「願うこと」とも言い換えられる。勿論、意志する内容は何でもよいわけではない。善行の他に、神の思い、救済行為を行うこと等が挙げられる。

## （二）働きの実行

まず最初に、意志することが重要だとしても、それだけで十分なのだろうか。クリュソストモスは次のように勧める。

「それで、万事につけて、意志しただけでは十分ではなく、働きも付け加えなければならぬ。だが、あなたは天に上っていくことを願っていて、『私は意志する』と言うだけなのか。だから、『どうしてあなたは、意志することです十分だ、と言っていたのか』と彼らは述べる。働きを伴って意志すること、行いに至ること、苦勞することだ」。

つまり、実行に移すことである。行為なしにただ意志するだけならば、無意味である。ただ、そうは言っても、実行はそれほど難しいことではない。この箇所、彼はこう続ける。

「實際、我々には共働し、協力して下さる神がおられる。我々は、ただ選ぼう。ただ、働き「に近づく」ように行いに近づこう。ただ、気に懸けよう。ただ、自分の念頭に置こう。そうすれば、万事がついてくる。だが、もしも我々が眠っていて、いびきをかきながら天に入っていくことを期待するようなことがあれば、どうして天の嗣りを保持することができようか」。

実行を意志するだけでよい。これすらしないならば、救済もない。これと、ただ何もしないこととは、大違いである。とにかく、開始してみることが肝要である。それを意志できるのは、人間に他ならない。その時、人間しか働いていないように見えるかもしれないが、神の共働が始まる。その働きとは、具体的には努力、聞くこと等である。

同様のことは、祈りにについても妥当する。

「彼は『それでは、祈りは何の益ももたらさないのか』と述べる。それは大きな益ももたらすが、我々も何かを行う時にそうなる。…(中略)…なぜなら、もし祈りに何も働かない我々を御国に導き入れる力があるとすれば、なぜすべてのギリシア人がキリスト教徒にならないのか。…(中略)…なぜ、悪人たちが善人にならないのか。だつたら、「我々が」自分で何ら貢献することができない故だということが、明らかではないか。それだから、我々も自分のなすべき分を貢献する時に、祈りは大きな益をもたらすのである」。

ここでは伝道活動について語られるが、これは言わば祈りの単働論に対する反論である。「自分のなすべき分」(tu rap' eavrov) は、直訳すれば「自らによる諸事」だが、クリュソストモスの共働論で人間の役割を表す決まった表現で、頻出する。

(三) 働きがもたらす結果

それでは、人間が神との共働を意志し実行に移した結果は、どうなるのだろうか。クリュソストモスは預言者ダニエルについて、彼に恵みの全面的協力があつたのは、自分の選択が先行したからだと説明して、「したがって、もし我々も自分自身をこういつたようにしようと意志する場合には、今でも恵みが臨在するのである」と語り、その現在性、有効性を主張する。

彼は「彼（神）を引き寄せる責任が我々にあることは、明らかである」と述べているように、神の恵みが人間の働きの後に来ることを人間が神の共働を「引き寄せる」と一貫して表現する。彼のフィリピ一・六解釈によると、パウロらが自由意志によつて、完成する神の共働への信頼を表明した働きの結果、神の恵みが来る。神の働きを導くのが人間の働きだからこそ、賞賛に値する。<sup>41</sup>クリュソストモスは、単働論的なエレミヤ一〇・二三を取り上げた講話「主よ、人によるのではなく」について』の結論部分でこう語る。

「したがって、我々の善行が我々と神次第であることは、あらゆる箇所から明らかである。『意志することにもよらず、努力することにもよらず、憐れんで下さる神による』（ローマ九・一六）も、こういうことである。『また、もし万事が私次第でなければ、何のために私が努力しているのか。また、何のために私が意志しているのか』と彼（パウロ）は述べている。あなたが意志することと努力することを通して、神の決定と好意を引き寄せ、その結果共働していただき、御手を差し伸べていただき、完成まで導いていただくためである。実際、もしあなたがこれをせずに、努力することと意志することを止めるようなことがあれば、神が御手を差し伸べて下さらないばかりか、御自身も身を引かれることになるだろう。…（中略）…これ故、神さえも引き寄せるために、意志す

ることも努力することも、我々には必要である」。

これまで考察してきた人間の意志と実行も全て、神の働きを引き出すために必要なことだったのである。しかも、このことは周辺のな内容でも、一時的な原則でもない。クリュソストモスはこの後、「だが、これらのことは全て、規準 (κανόνες)、規定 (ἄποδος)、不動の教義 (ἄσπαστα δόγματα) である」と語り、最大級の表現を駆使してその真理性を宣言する。更に、彼はこの講話全体を次のような実践の勧めをもつて終える。

「だから、これらのことと、意志することと努力することが我々次第であることを知って、意志することと努力することを通しても、神を我々の助けにまで引き寄せよう。だが、彼を引き寄せた我々は、行いの完成まで到達することになる」。

### 三 神人共働における神の役割

#### (一) 働きの決定

二、で考察したように、人間が働く必要があるとしても、逆に万事が人間次第なら、人間は非力なので安心できないのではないか。このような疑問に対して、クリュソストモスは次のように考える。勿論、人間は万事を働くことができるわけではない。特に、人間の自然本性を超える業に関しては、神の共働が不可欠とされる。また、共働の主導権も人間にあるわけではない。前述の人間による神の共働の引き寄せも、神の側から見るとこうなる。

「ここでもまた、万事が上からの恵みによっていた次第を考察しなさい。実際、我々が自分のなすべき分を貢献し

た時、神による共働も豊かに得ることになる。実際、我々が怠けないように、弛んでしまつたりもしないように、我々も何かを共に貢献することを彼（神）は願つておられる。こうして、御自分のなされるべき分も呈示して下さるためである。また、万事が上からの助けによつて起こるわけでもなく、むしろ我々も何かを共に貢献しなければならぬ。また、彼は我々の弱さが著しいことを御存知で、万事を我々から求められるわけでもないが、御自分の慈愛を覚えておられ、また御自分の名譽を呈示されるために何らかの根拠を受け取ることを願つておられて、我々のなすべき分が貢献されるのを待つておられる」。

神はその慈愛故に、人間と共働したいと思つてゐる。しかし、その名譽故に、闇雲に共働することはできない。したがつて、人間の側の共働を待つてゐる。このテキストでは、「万事」が三回登場する。最初に万事は神の恵みによる、と言いながら、その内実は二つの否定によつて表現される。第一に、万事が神によつて起こるのではなく、人間も分担しなければならぬ。第二に、確かに神は人間に分担を求めるが、万事を求めることはない。クリュソストモスは両極端を否定し、共働を主張するのである。その際、神の分担と人間の分担が決まつてゐる。

神の慈愛深さは、まだ共働を意志していない人々やまだ実行していない人々にさえ向けられてゐる。それならば、既に意志し、実行した人々に対しては言を俟たないはずである。だからこそ、クリュソストモスはこう断言する。

「実際、我々が意志し、選択し、願つたのだから、神がお見捨てになることなど、あり得ない。実際、もし願つていない者たちに意志し願うように勧め、助言しておられるなら、なおのこと選んでゐる者たちをお見捨てにはならない。…（中略）…実際、一心に神に望みを置いている者や自分でなすべき分を全て貢献している者が完成から落伍することなど、あり得ない」。

この場合の人間の働きは、必然的に神の働きを導く。これはいわば、神は神を助ける人間を必ず助けるということである。ただ、一般的にそう言えるのだが、具体的に誰と共働するかは飽くまで神の決定と好意による。<sup>(48)</sup>神が人間の申し出を見た上で、共働するか否かを公平に判断する。<sup>(49)</sup>共働は神の決定を必要とするので、人間だけで勝手にできるわけではない。

## (二) 援助の実行

さて、神による共働が決定された人間の働きは、その後どうなるのだろうか。クリュソストモスによると、「実際上からの右手が我々に協力して下さる時、難しいことが簡単になり、困難なことが容易に「なる」<sup>(50)</sup>」。神の共働は、人間の働きをしやすくするだけであって、神が人間のなすべき働きを肩代わりしてくれるわけではない。具体的には、伝道に関して言うと、「賜物を授け、言葉を分かりやすく教えを明らかにし、種を蒔き、聞くことが稔りに至るよう<sup>(51)</sup>に助けて下さることは、「彼(神)」に属する」。

したがって「恵みのみ」ということも、人間がいつまでもそれに依存して、自分で働く必要がないことを意味しない。クリュソストモスの解釈はこうである。

「実際、敵でさえあった我々を救わなければならなかった時分に、恵みによって救って下さった方が、働く者たち(我々)もご覧になる時、なおのこと協力しては下さらないだろうか<sup>(52)</sup>」。

「恵みのみによる救済」も、被救済者の誉れを無視することではない。人間の働きを見て、それに応じて援助する。これは「なおのこと共働する神」の原理である。モーセらの渡海という不可能を可能にした奇跡に触れて、彼は語る。

「実際、もし恵みだけだった場合に彼(神)が共働して下さったのなら、自分の苦勞も呈示する場合には、なお

のこと協力して下さらないだろうか。もし、何も働かない者を救つて下さったのなら、なおのこと働く者を助け  
ては下さらないだろうか。だから、確かに上で私は『あなたは、不可能なことによつて困難なことについても確  
信するべきである』と言つていた。けれども、今や私はこう言おう。『もしも我々が自制しているのなら、それら  
は困難でさえもなくなるだろう』と<sup>(83)</sup>。

「なおのこと共働する神」の原理は、ここでも有効である。人間の共働は、決して徒勞には終わらない。それに神の  
共働が呼応すれば、困難な働きも実に容易になるので、安心できる。ただ、それが常に人間の目にも明らかにな  
わけではない。逆に、最も容易に見える状況でも、神の共働は行われる。それを教えるローマ八・二六を引用してから、ク  
リユストモスはこう述べる。

「だが、彼（パウロ）はそれらを語つて、我々を巡る御霊の多大な摂理を強調するとともに、人間的な推論には  
有益に見えることを必ずしもそうだと考えないように彼らを教育してもいた<sup>(84)</sup>」。

ここで、一、(二)で扱つた彼のローマ八・二八理解のように、神の摂理的配慮と神の共働が繋がる。「神は万事をこ  
の義人（ヤコブ）の益のために摂理的に配慮して下さる（οικονομῶν）方であられたので、一切のことにおいて彼に御  
自身による共働を与えて下さつていた<sup>(85)</sup>」のだ。このことは普遍妥当的で、「誰でも神の思つておられることに従つて、  
自分自身に関することを管理したいと思う時、いつでもこのような上からの共働を得る<sup>(86)</sup>」。神は人間の働きを奪わず、  
人間の働きや思案が及ばない領域で働くことで、援助を行つてゐる。それが、摂理的配慮である。その結果、万事が  
善に変わっていく。

## (三) 完成を担う神

神が共働している場合、人間の働きは容易になり、その結果容易に完成することになるので、安心できる。クリュソストモスは「だが、もし神が完成して下さることになれば、労苦も多くなるだろうが、彼によつて助けられるから容易に万事を終えるので、安心しなければならぬ」と述べている。つまり、共働を開始したのは人間だったが、それを完成させるのは神の役割である。

また、クリュソストモスはこう語る。

「彼(パウロ)は『善行は彼らだけのものである』とも言わず、『まずは神のもの』と言った」。実際、『私は、あなたがたの中でよい働きを始めて下さった方が、イエス・キリストの日までに完成して下さることを確信している』(フィリピ一・六)と述べる。これはつまり、『神が『完成して下さる』ということだ。だが、彼は『私はあなたがたに關してだけでではなく、あなたがた「の働き」による人々に關しても、そうである』と述べている」。善行は人間だけのものでもなく、神だけのものでもない。クリュソストモスはその両方を否定する。そして、人間の働きを完成するのも、神である。それでは、そもそもなぜ、「万事は神による」とも強調されていたのだろうか。クリュソストモスによると、例えばコリント教会の人々が錯覚して、神との共働を自分たちだけの働きであるかのように誇ろうとしていたからこそ、それを戒めるために神の支配を強調する必要があった。「たとい、あなたがたの故でもあつたとしても、万事は神の下で起こつていた」のだ。そうでなければ、それだけを強調する必要はなかつた。



## 四 人間の働きと神の働きの関係

### (一) 共働成立の根拠

本来、万事は神のものであるから、神自身としては何も不足しておらず、人間の共働を必要としてはいない。無論、すべての神の働きが人間との共働であるわけではない。特に、創造の業においては、人間はおろか、いかなるものも共働も強く否定されている。その神が、救済の業においては、人間への慈愛故に人間による共働を求めた。そうしなければ、人間は本来怠惰であるから、何も働かない傾向がある。何も働かないままであれば、神の共働も救済もないからである。クリュソストモスは述べる。

「神もこのようにして下さり、人間を非常に尊重して下さって、彼から離れることも願われないで、一方では御自身に依拠するようになされ、他方では御自身との共働者たちに任じて下さった<sup>61</sup>」。

このような人間の尊重がなければ、そもそも共働は成立し得なかつた。神の共働を引き寄せたのが必然でなく人間の意志だったように、人間の共働を求めたのも必然ではなく神の意志だったのである。

聖書理解との関係で言うと、確かに万事を変える神の共働（ローマ八・二八解釈）の影響が大きいのが、新約で主流だった人間の共働の方もそれに劣らず大きな役割を果たしている。それに加えて、両者の関係が相当考察されているのが、クリュソストモスの共働論の特徴と言える。彼は決して、神の全能の働きを等閑視するわけではないが、この場合の主要な問題意識は人間の怠惰さに向けられていた。だからこそ彼は、人間の尊い苦勞を非常に高く買っていた。それでも、同時に神の慈愛の深さも痛感していた。その両方を何とか最大限に生かそうとして、バランスを取ってい

た。そんなクリュソストモスは、パウロにも自らと同じ姿を見出す。彼は第一コリント三・九を受けて、こう問いかける。

「彼（パウロ）が前の方では万事が神のものであることを示したのに、彼らにも小さくない働きを与えた次第をあなたは考察しているか」<sup>(2)</sup>。

## (二) 共働の相互性

様々な聖書テキストの単働論的解釈を排し、共働論を主張してきたクリュソストモスだからこそ、「共働」という語が使用されていない、祈りの共働テキストも見逃さない。これは共働論が最もまとまっている箇所なので、長さを厭わず引用しよう。

「万事を聖徒たちの祈りに任せて、彼らは何も働かなかつたり、悪徳に走つたり、徳のために貢献しているいかなる者をも捕まえて詰つたりするべきではない。また、善を働いている者たちもその（祈りの）共働を軽視す「べきではない」。実際、確かに我々のための祈りは大きなことができるが、それは我々も働く時に大きいのである。これ故、彼らのために祈るパウロも、また約束によつて信頼に足ることを置いて、次のようにも述べる。『だが主は誠実であられ、あなたがたを支えて下さり、悪から守つて下さる』（第二テサロニケ三・三）。実際、あなたがたを救いへと選ばれたのであれば、偽られることはないし、決して滅びることをお許しになることもない。

だが、これらを通して懈怠に導かないように、また万事が神のものであると考えて、彼らが眠つてしまわないように、彼（パウロ）が次のように言つて彼らによる共働も求める次第を考察しなさい。『だが、あなたがたについて、我々が伝えていることをしているし、するようになることを我々は主にあつて確信している』（同三・四）。

だから、『確かに神は誠実で、救うことを約束して下さる方であられ、いかなる場合でも救って下さるが、約束して下さったように「そうされる」と彼は述べている。だが、どのように約束して下さったのか。もしも、我々が意志し、彼に聞くなれば、との「約束」であつて、単に「約束されたの」でも、木や石のように何も働かない者たちを「救うことの約束」でもない。

だが、『我々は主にあつて確信している』ということも、よくぞ置いておいた。これはつまり、我々は彼の慈愛を信じている、ということだ。そこではまた、彼は彼らの意気を挫いて、万事を委ねている。実際まず、もし『だが、我々はあなたがたを信じている』と言つた場合は、賞賛は大きかつただろうが、彼らに一切のことを神に委ねることを教えてはいなかつただろう。逆に、もし『だが我々は、彼（主）があなたがたを守って下さることを主にあつて確信している』と言つて、『あなたがたについては』と『我々が伝えていることをしているし、するようになることを』を付け足しておかなかつた場合には、彼らを万事を神の御力の上に投げ出してもつと働かない者たちにしてしまつていたことだろう<sup>68</sup>。

このように共働がうまく成立している場合、人間が働く時、常に神も共働しており、神が人間に共働を求めるとき、それはすでに神の働きでもあつた。その場合でも、働きの内容は相互に異なっている。神でなければできない働きがある。それと同様に、人間でなければできない働きがある。その両者それぞれの分担が明確に決まっているからこそ相互に代替不可能で、いずれか一方が欠けても共働は成り立たない。名ばかりの共働ではなく、このように飽くまで両者の相互的働きこそが、「共働」の名に値する。その理想的状態を端的に表現したのが、次の一文である。

「こうして、我々には共働者なる神がおられるようになり、我々自身も彼の共働者になる」<sup>69</sup>。

ここでは神人が相互に共働し合い、相互に共働者である。ただ、神が共働者であることは本来的だが、人間はそのままで神の共働者ではなく、共働者になるのである。

## 結び

本研究で考察したクリュストモスの共働論をまとめると、次のようになる。神は人間に共働を求めたが、強制はしなかった。人間は自由意志によって神の業を働くことを意志し、実行して、その結果神の共働を引き寄せる。共働することを決定した神はその人間を援助して働きやすくし、人間の能力を超えた領域で摂理的に配慮して、人間の働きを完成させる。人間は神の働きの領域で働くことができないし、神も人間の働くべき領域で人間に代わって働くことはない。この働きは互恵的で、相互に相手にとって必要不可欠であり、言葉の真の意味で「共働」なのである。

この共働論と「神の支配」の考えは、両立可能である。第一に、共働の存在根拠は飽くまで神がそれを求めたことにある。第二に、個々の共働は神の思いに従って人間が思う場合にのみ、成立する。第三に、共働の実行は人間が行うが、それに神も参加するので、同時にそれは神が行っていることにもなるからだ。したがって、これも「神の万物支配」解釈の範囲内にあると言え、パウロの「恵みのみ」の言とも矛盾しない。このようなクリュストモスの共働論の視点から見た場合、神人いずれかの単働だけを主張する方がむしろ、不自然に見える。この理解なしに、共働論から一部の言説だけを取り出して、後の西方の恩恵論の別の視点から判定する場合に、「神人共働説」との批判が可能になる。このように、クリュストモスは一貫したまとまりを具えた共働論を持っていた。これには、恩恵に関する考えも

勿論含まれるが、それに留まらない。救済論やそれを越える神人関係全体を見渡した、より広い視点を有しており、西方とは別の切り口で恩恵の問題も扱われただけである。だからこそ、同じ共働論の範囲で創世記のヨセフ物語から預言者エレミヤ、使徒の伝道、祈り、そしてパウロ書簡の恩恵まで、同様に扱われた。クリュソストモスが「不動の教義」として積極的に主張するこの共働論を、恩恵論の枠内に留まる「神人共働説」的と呼ぶこと自体が適切でない。まして、彼を始めとするギリシア教父たちを「神人共働説」の嫌疑から救う、必要など、そもそもないのである。

註

本研究のテーマは、片柳榮一先生の京都大学での講義に触発されて着想を得たものである。類例には事欠かないが、先生の長年の触発への深い感謝の印だ、ここにそのほんの一例を形にちせていただいた次第である。

- (一) 詳しくは、山田望「キリストの模範——ペラギウス神学における神の義とハイデーマ——」教文館 一九九七年、参照。
- (二) 44の詳細は、G. Bertram, "synergos, synergēō", in: Gerhard Friedrich (ed.), *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, 7, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1964, 869-875 参照。
- (三) Erkehard Mühlberg, "Synergism in Gregory of Nyssa", *ZNW* 68 (1977) [93-122], 99sq. 参照。

ヨアンネス・クリュソストモスの神人共働論 (武藤)

(4) 例として、Mühlberg, "Synergism in Gregory of Nyssa" 43-44 参照。

(5) Tomás Spidlik, "Synergie: En Orient chrétiens" in: *Dsp* 14 (1990) 1412-1417.

(6) Rudolf Brändle, "Synergismus als Phänomen der Frömmigkeitgeschichte, dargestellt an den Predigten des Johannes Chrysostomus", in: F. von Liliencfeld/E. Mühlberg (ed.), *Gnadenwahl und Entscheidungsfreiheit in der Theologie der Alten Kirche*, Erlangen, 1980, 69-89; 113-121 (著者未記); Id., "Gott wird nicht allein durch richtige Dogmen, sondern auch durch einen guten Lebenswandel verherrlicht. Zur Verhältnisbestimmung von Glaube und Werken bei Johannes Chrysostomus", *Theologische Zeitschrift* 55 (1999) 121-136 (= Id., *Studien zur Alten Kirche*, Martin Heimgartner/al. (ed.), Stutt-



- (73) *Homiliae in Ep. II. ad Thessalonicenses* 5, 1 (PG 62, 493).
- (78) *Homiliae in Ep. I. ad Thessalonicenses* 1, 3-4 (PG 62, 397).
- (83) *Homiliae in Ep. ad Romanos* 3, 4 (PG 60, 416).
- (97) *Homiliae in Ep. ad Philippenses* 1, 3 (PG 62, 185). 人間  
の責任をとりつゝ、次のちひさき語をわづらふ。  
「[「ただかこつて、あつ善行をなすことよが神の助け  
策だ」とすれば、たゞの私が善行をなすべからず、あ  
れはならかなる責を負う権利もなごことなごつて、あ  
らだらふ」と彼は述べてゐる。美談、私が私自身のな  
すべからざるべくて用ゐして、意地、選択、行ふに  
従事しよとせざるだまかなわらむ、完成を担われる方  
が協力をして、知らむ、御手を差し伸べておとせぬな  
い場合、私はあらゆる非難から解放されてしまつたこ  
ととなるからだ。しかし、そんなことなら、そんな  
ことなら、さうだ」(In illud, Domine, non est in  
hominē 5 (PG 56, 161))。
- (117) *Homiliae in Ep. ad Philippenses* 1, 3 (PG 62, 185).
- (127) *In illud, Domine, non est in homine* 5 (PG 56, 161).
- (137) *Ibid.* (PG 56, 162).
- (147) *Ibid.*
- (157) *Homiliae in Ep. ad Philippenses* 1, 3 (PG 62, 185);

ヨアンネス・クリュソストモスの神人共働論 (武藤)

- Homiliae in Ep. I. ad Corinthios* 3, 4 (PG 61, 28) 參照°
- (49) *Homiliae* 67 in *Genesim* 53, 2 (PG 54, 466).
- (47) *In illud, Domine, non est in homine* 5 (PG 56, 161).
- (38) *Ibid.* 參照°
- (39) *Homiliae in Ep. ad Philippenses* 1, 3 (PG 62, 185).
- (50) *Homiliae* 67 in *Genesim* 54, 3 (PG 54, 474).
- (15) *In illud, Messis quidem multa* 5 (PG 63, 524).
- (25) *Homiliae in Ep. II. ad Timotheum* 2, 1 (PG 62, 608).
- (35) *Homiliae in Matthaeum* 39, 4 (PG 57, 438).
- (45) *Homiliae in Ep. ad Romanos* 14, 7 (PG 60, 532).
- (55) *Homiliae* 67 in *Genesim* 55, 2 (PG 54, 481).
- (65) *Id.* 53, 3 (PG 54, 468).
- (75) *Homiliae in Ep. ad Philippenses* 1, 3 (PG 62, 186).
- (85) *Ibid.* (PG 62, 185).
- (95) *Homiliae in Ep. I. ad Corinthios* 10, 2 (PG 61, 84).
- (105) *Homiliae* 67 in *Genesim* 5, 4 (PG 53, 51sq.) 聖、參照°
- (115) *Homiliae in Ep. ad Ephesios* 11, 4 (PG 62, 85).
- (125) *Homiliae in Ep. I. ad Corinthios* 8, 3 (PG 61, 72).
- (135) *Homiliae in Ep. II. ad Thessalonicenses* 5, 1 (PG 62, 491-493).
- (145) *Homiliae in Ep. ad Philippenses* 8, 2 (PG 62, 240) 參照°
- (155) *Homiliae in Ep. ad Romanos* 14, 11 (PG 60, 539).